

英語プレゼンテーション指導の可能性

—高専生の英語コミュニケーション能力の養成—

石川 希美*

Possibilities of Teaching English Oral Presentations: Cultivating English Communication Skills among Kosen students

ISHIKAWA Nozomi

Abstract

This paper will discuss teaching English oral presentation skills for Colleges of Technology, Kosen, students. Nowadays, having a good command of the English language seems to be one of the crucial skills for engineers or engineering researchers. Opportunities to communicate with people abroad have been increasing in this field. In addition to reading and writing skills, there is an urgent need to develop oral communication skills in English, preferably enough to give a presentation in English at a conference or a meeting in front of an international audience. Comparing English classes at universities with activities at Tomakomai National College of Technology, I will suggest that developing writing ability in English and acquiring a good delivery are the key elements.

1. はじめに

最近では、英語教育において発信型のコミュニケーションが重視されるようになってきている。これは、「英語を能動的に運用できるような能力やスキル」を意味しており、例えば意見を口頭で述べる、メールを書くなど、具体的にできることを表すこともある。特に、工学系の分野においては、産業・技術のグローバル化に伴い、技術動向の把握、技術開発、外国人技術者との交流などにおいて実際に英語を使いこなせる能力が求められるようになってきている。また、アカデミックな場面では論文執筆や学会発表でのプレゼンテーション能力が求められていることから、工学系の大学での英語教育において、英語でのプレゼンテーションに取り組む授業が実施されている。また、高専の教育と関わりの深い JABEE の認定基準¹⁾においても、口頭発表能力や、英語でのコミュニケーション能力について言及されている。

高専においては、各高専レベルで海外インターン

* 文系総合学科 准教授

シップが実施されているほか、平成 21 (2009) 年からは独立行政法人国立高等専門学校機構主催「海外インターンシップ」が始まった。実際に海外での研修によって、日本語や英語があまり通じない環境でもコミュニケーションをとることを体験する。英語圏でない国々においても、現地で研修先のスタッフとコミュニケーションをとるときは英語を使うこともあり、成果発表なども英語で行っていることから、高い英語運用能力の必要性を体験する機会になっている。さらに、英語の運用能力を高めるという観点からは、高専では平成 20 (2008) 年より全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテストを開催しており、予選を勝ち抜いた全国各地の高専生たちが英語でスピーチやプレゼンテーションを行う機会が設けられた。

本稿では、大学での英語プレゼンテーションの授業や苫小牧高専での取り組みを事例に、高専における英語プレゼンテーション指導の可能性を考察する。プレゼンテーションは、一定の時間あるテーマについて聴き手の前で発表・説明・実演することを指し、

口頭で話すだけでなく、視覚資料（例えば、プレゼンテーション用のソフトウェアを用いて作成したスライド）などが使われるものも含む。また、プレゼンテーションの後で内容に関する質疑応答が行われる場合も含める。また、「英語プレゼンテーション」や「英語でのプレゼンテーション」といった場合には、使用言語が英語の場合を表すこととする。

2. 英語プレゼンテーションの指導例 ～大学の場合～

英語プレゼンテーションの指導については、近頃では大学・大学院生を対象にした授業実践例が多く記されている。この中から、特に高専とも関わりの深い理工系の学生を対象とした事例を取り上げる。

まず、小野・森村(2008)は、大学院生向けの授業において、科学技術英語論文の書き方および英語でのプレゼンテーションの仕方を指導している。15週のうち前半8週では、論文の書き方や口頭発表の仕方を学び、後半7週は英語のネイティブスピーカー講師による英語のプレゼンテーションを実践するという組み合わせになっている。これは、英語での論文執筆、プレゼンテーション（口頭発表）に関わる問題点を克服することを目指した取り組みだとしている。小野・森村は、(1) 英語の論文を日本語の発想で書いているため、英語に翻訳されても相手に伝わらない、(2) 日本の教育の中にプレゼンテーション技法の習得が含まれていないので、基本的な事柄も知らないまま英語でのプレゼンテーションに臨んでいる、(3) 英語でも（日本語でも）人前で話すことの訓練をしてきていない、という点が問題だとしている。さらに、3点目については、「日本人の多くは「口数多くぺらぺら」しゃべることをよしとしない風潮」(p. 49) があると述べている。

篠塚(2008)は、これまで理系学部の専門英語教育は、研究者の養成という観点から、科学論文を正確に読むための読解や、学術論文のために必要な文法力や英作文を中心とした英語授業を実施してきたところが多いと指摘している。基礎力を充実するうえでこういった授業内容の重要性は否定されるものではないが、教育および研究のグローバル化に伴った社会のニーズに応えられる英語の力、つまり英語を実際に使いこなす能力を育成していなかったと述べている。そのような考えから、英語による討議とプレゼンテーションを行うことを目指した授業内容で、「能動的な発言を奨励する教育スタイル」(p. 57) になるよう、工学部の2, 3年生を対象に、学生6~8

人を1グループにした少人数教育を実践している。

さらに、授業外でも「課外オープントレーニング講座」という名称で、基礎的な内容から専門的な分野まで、研究者同士のディスカッション、学会発表の発表者と質問者などの場面を想定した内容で、英語でのリスニング、ライティング、スピーキングを反復訓練する取り組みを実施している。こちらは、大学3年生から大学院生までを対象としている。また、学生たちを国際的なイベントに実際に参加させて、海外から出展されたブースを回り英語で質疑応答をして、その内容をレポートにまとめる「学生フィールドワーク」という実践的な取り組みも紹介されている。

田村(2008)の事例では、「自分の研究テーマが英語でプレゼンテーションできること」を目標にしており、その実現のための授業内容は、(1) Web情報や文献・技術情報を読む、(2) 電子メールを書く、(3) テクニカルライティング、(4) 英語プレゼンテーション、(5) 国際会議の参加、以上5点にまとめられている。こちらも大学院生を対象にした授業である。田村は、英語でプレゼンテーションすることを大きなテーマに掲げて、そのためには必要となる内容(文献を読むなど)を随時取り入れながら学ばせる「組み込み型」授業を実施し、効果があったという結果を得ている。プレゼンテーションを作り上げていくまでの段階で必要な事柄をその都度学んでいくため、学生にとっては、その内容を学ぶ必要性和実用性が非常に高いと感じられ、また必要性に駆られることによって、その学習の重要性を認識し、課題へ取り組む意識も違ってきただろうと思われる。

以上の例に共通することは、これまでの英語の授業のやり方では、実践的なコミュニケーションを行う力を養成するには十分でないという反省にいたり、理工系の大学生・大学院生が将来英語を使うことになる状況を想定して、授業内容(論文執筆やプレゼンテーション)および学生が主体的に参加しながら学ぶ授業スタイルに変えたことである。理工系学部の英語教育のカリキュラムそのものを変えて、大学1, 2年は聞いて話すことを中心にした授業から始まり、3, 4年はプレゼンテーションやディベートに取り組むといった流れをつくっている。古屋・Bright・雑賀(2008)の例では、3年生で実施する3週間の海外研修において、受け入れ先の大学の専門科目プロジェクトに参加して貢献するまでに至ったという報告もある。いずれの例も、理工学系の学部・大学院の学生が在学中・卒業後に英語を実際に使う場面に必要なスキルという観点から、学科として英語教

育に力を入れていることがわかる。「プレゼンテーションを英語で行う」という目標実現のために求められるライティング、リーディングというのは、授業の目的が分かりやすく、学習者はためになるし、やりがいがあると受け止めているようだ（小野・森村（2008）、田村（2008））。

大学においては、英語プレゼンテーションの指導は、学生自らが英語を使い練習をすることが念頭にある。英語での表現という点では「話す内容を英語でまとめていく」とことと「相手に伝わるように表現する」ことの2点を中心に行われていること、さらに、国際会議や学会発表を視野に入れており、おもに研究内容など専門的な内容についてプレゼンテーションをすることに取り組んでいることが分かった。

3. 苫小牧高専の英語プレゼンテーション指導

苫小牧高専において、学生が英語でプレゼンテーションをする機会は、(1) プレゼンテーションコンテストに参加する、(2) 海外研修の共同教育プログラムに参加する、(3) 専攻科での国際遠隔授業においてグループ発表を行う、の3つの機会があげられる。

まず、プレゼンテーションコンテストには、本科・専攻科生を問わずどの学年でも参加できるが、一校当たりの出場枠が決まっている。このコンテストは、スピーチ部門とプレゼンテーション部門からなり、スピーチは地区大会、プレゼンテーションはビデオ審査を経て、全国大会へとつながるコンテストである。プレゼンテーション部門は、3人1チームで、制限時間10分で発表をする。テーマは「高専の特色を生かしたテーマが望ましい」とあるだけで、特に決められてはいないので、各グループが考えて決めることができる。²⁾

次に、海外研修における共同教育は、海外協定校との協力のもとで海外研修中の教育活動として実施している。海外研修の参加は任意のため、学年や学科は様ではない。平成19(2007)年度には、他国からの留学生たちとともにサステナビリティ(持続可能な社会)をテーマとした討論やニュージーランドのリサイクル事情に関する調査ののち、その内容をまとめたものを学生がTV会議システムを通じてプレゼンテーションを行った。現地での調査、原稿を書く、発表の練習といった作業は、ESL教員や本校の教員の指導を受けた。これらについては、2週間の研修期間内に行われており、短期間集中型の取り組みである(松田・石川(2008))。

また、平成21(2009)年度以降は内容を変えて、現地の小学校を訪問して学生による科学実験授業を実施している。学生たちは、渡航前に実施する科学実験テーマを考えて、事前に実験器具や手順をまとめ、英語での説明事項を準備する。渡航後、あらためて英語表現や発音などを中心にESL教員から指導を受けている。

現地では、実験材料・注意事項・手順をすべて英語で説明しながら、小学生と一緒に作業をしていく。説明は簡潔な表現を使って行うが、相手が説明を聞いたうえで理解してもらえないと作業がすすまないという問題が生じる。そのため、学生は「大きな声ではっきりと話す」、「言葉で伝えきれない部分は身ぶりなどを使う」など、相手に伝えるように話すことに意識を向けていることが、帰国後の調査でわかった。

一方で、実験中や実験後に小学生からいろいろと質問を受けるが、学生たちが「すぐに答えられない」、「何と聞いていいかわからない」といったことも体験している。これは、プレゼンテーションのあとの質疑応答(Q&A)に対応することに相当すると言えるだろう。学生が自力で対応しようとしている場合、教員らの支援を得ている場合もあり、学生にとっては、質問に対しての答え方についても、英語で話す練習や準備がないと不安なようである。

3つ目については、平成19(2007)年度より専攻科1年生を対象にした遠隔授業の取り組みである。学生は、ニュージーランドにいる相手グループに対して、毎回決められたテーマに関する発表をしたのちに、相手からの質問に答えることになっている。ニュージーランド側は、日本語や日本文化に関心のある団体で、一般人から学生まで幅広い年齢層が集まっている。本校の活動としては、学生はいくつかのグループに分かれ、各グループとしての発表の機会は通常2回設定されている。グループ発表という形式ではあるものの、一人ひとりが必ず話すことが指示されている。TV会議システムを利用して、実際に英語を聞いてもらう相手がいる中で発表を行うため、早口で話したり、声量が十分でない場合には、「はっきり聞こえなかった」、「もう一回話してほしい」という相手からの反応がすぐにあり、発表者はその場で適切な対応をする必要がある。例えば、マイクに十分音声を拾ってもらえるように、ゆっくり目にはっきりと話すといったことである。また、カメラに映ったものがそのまま相手側に映るため、相手と目を合わせることはカメラに視線を合わせて顔をあげて話すこと、感情や思いを伝えるように自然

とボディランゲージを使うことにもつながっている。

授業後のアンケートの結果から、学生はプレゼンテーションの準備等は大変だが、自分たちが話したことについては相手に理解してもらえたと感じていることがわかった。しかし、相手から質問をされてもわからなかったり、答えられなかったりしたためか「英語が聞き取れない」と感じていることや、クラス単位ではなく「少人数で実施してほしい」という希望もあることがわかった（松田・石川・小野（2008）、石川・松田・小野（2009））。

苫小牧高専の取り組みについて、おおまかにまとめると、(1) 自分の考えや伝える事柄を英語にすること、(2) その内容を相手に伝える（発表する）こと、(3) コミュニケーションへの積極的な姿勢をもつこと、以上3つが求められる内容となっている。

(1) については、話す内容を考えて英語で書くこと、(2) については、相手に言葉で伝えることに加えて、言葉以外の要素（身ぶり手ぶり、視覚補助）も使いながら、相手に理解してもらるように話すこと、(3) については、相手から質問などを聞き答えること、さらには相手とのコミュニケーションをつなげ、深められることを意図している。

苫小牧高専の取り組みの特徴は、授業科目は、専攻科における遠隔授業のみである。また、遠隔授業と海外研修の取り組みにおいては、聞き手は主に英語を母語とする人たちで、その人たちに直接伝えることを実践できる。海外研修やプレゼンテーションコンテストについては、自主的に参加した学生が取り組むもので、具体的な指導はそれぞれの参加者に対して行われている。海外研修の取り組みは、海外研修参加学生は、英語を使うことに関心があり、現地の人たちとの交流を期待しており、環境問題や科学実験授業は高専にも関わりのあるテーマを扱っている。一方、プレゼンテーションコンテストについては、コンテストという性質上、内容・表現などのあらゆる点で完成度が高いものが求められる。

4. 高専と大学における英語プレゼンテーション指導の比較

英語プレゼンテーションの指導について、苫小牧高専における事例から、高専レベルの取り組みはそれぞれ性質が異なるものであり、大学での授業科目としての取り組みと比較しても異なっていることがわかる。大学と比較して、高専の取り組みの特徴は、

(1) 英語でのプレゼンテーションは、授業科目および授業以外の場面でも行われている、(2) 英語プ

レゼンテーションの内容は、学術論文や専門性の高い内容について話すことが中心には扱われていない、

(3) 少人数のグループで1つのプレゼンテーションをする、(4) 英語を母語とする人々が主に聴き手になっている、(5) プレゼンテーションのコンテストがある、の5点である。

(1) については、高専での3つの取り組みがあることを先ほど述べた。授業としての取り組みは遠隔授業のみであるが、学生は科学実験やコンテストなどの場面において、英語プレゼンテーションをする機会がある。大学では授業科目として半年や一年をかけて取り組む例が多くみられたのだが、小野・森村（2008）は、「日本語でも人前で話す訓練がされていない、プレゼンテーションの技法を知らないという学生たち」が対象であるとしている。一般的な大学生は大学に入学してからプレゼンテーションを初めて経験する学生が多く、そのためにプレゼンテーションのやり方そのものを指導する必要が高いといえる。³⁾

しかし、高専では英語でのプレゼンテーションを行うための素地として、大学1, 2年に相当する高専本科4, 5年生で、国語や専門科目など他の科目において、口頭発表を行っている。例えば、4年生のインターンシップ研修の報告や、5年生の卒業研究の発表などである。つまり、学生たちは、あるテーマに関する原稿や発表のための視覚資料（スライド）を準備し、与えられた制限時間の長さで、人前で発表する経験をしている。そのため、プレゼンテーションの仕方については、準備から発表後の質疑応答まで一連の流れを体験的に学んでいる。授業で英語のプレゼンテーションを取り入れていく場合には、日本語でのプレゼンテーションをすでに体験していることは有利に働くのではないだろうか。実際、本校での事例としてあげた海外研修での取り組みや、専攻科の授業の取り組みは、短期間で実施することを可能にしているのは、学生たちは経験上プレゼンテーションのために何を準備すべきかを理解していることが大きいと考える。⁴⁾

(2) については、高専では「自分の伝えたいことを伝達する」、「意思が通じ合う」、「通じ合ったことを理解する」といったことを目指している。学術的な内容についてプレゼンテーションをすることを中心的には扱っていないが、例えば遠隔授業においては、身近な工学・技術というテーマで、ある製品について使われ方やその特徴について説明する課題が取り入れられている。科学実験や遠隔授業での英語プレゼンテーションは英語を使う実践練習をする

ことを重視している。英語学習の意味合いが学業成績のために偏りがちで、普段英語を使う機会も乏しいためである。そのため、専門性の高い内容について、英語表現自体も難しいものに取り組むことは行われていない。

(3) については、高専での3つの取り組みに共通するもので、グループでの協力・分担といった取り組み方を取り入れていることは大きな特徴である。また、グループでの発表になっているために、(2)の特徴で示したように、大学のように学術的な内容を話すということを扱っていないともいえるだろう。学科や学年も違う学生同士がグループで取り組む場合もあり、また発表を聴く学生や聴き手にとってもあまりに専門的なものではその内容がわからないこともでてくるからだ。⁵⁾

(4) は、普通の教室環境では、教員と授業を受けている学生が聴衆になるところだが、遠隔授業や海外研修の取り組みでは、相手は英語を母語とする(もしくはそれ相当レベルの)人々が聴き手である。聴衆から直接質問や反応が返ってくるため、学生がおこなった英語プレゼンテーションについて、相手が内容を理解してくれることは重要性がでてくる。学生が相手に「理解してもらえた」ことを経験することによって、英語を使うことへの自信や動機付けになる。さらに「相手が言いたいことはどのような内容か」について、耳を傾けようとする姿勢につながる。⁶⁾ プレゼンテーションコンテストでは、審査員との質疑応答があり、評価項目にも含まれている。

(5) については、英語スピーチや暗唱のコンテストに比べると、英語プレゼンテーションのコンテストはこれまで他に例がみられない。よって、これは高専の特徴的な取り組みであるといえる。

5. 高専における指導の可能性

前章の高専における特徴をふまえて、高専における英語でのプレゼンテーションの指導においては、(1) 伝えたい内容を英語で書き表わすこと(writing)、(2) 聴き手をひきつけるような魅力あるプレゼンテーションをすること(delivery および performance) が重要になると考える。本章では、この2点を挙げた理由を説明していく。

5. 1 アイディアを英語にする

遠隔授業において英語でプレゼンテーションをするにあたっては、学生はプレゼンテーションをするまでの準備の大変さを感じている。特に、自分の言

いたいことを英語にすることに苦労している様子が見られる。(松田・石川・小野(2008)、苫小牧高専(2008)、苫小牧高専(2009)) また、プレゼンテーションコンテストに参加した学生たちへの指導の場合でも、学生たちがとても時間がかかって苦労したところは、英語で原稿を書きあげていくことであったことが分かった。(苫小牧高専におけるコンテストの参加者数はまだ少数のため、アンケート結果の詳細についてはここでは述べられない。) そのため、基本的な語彙や文法を使って、英語で書くことに慣れさせていく指導をすることは、英語でのプレゼンテーションの準備を進めるうえでは、必要性が高いといえる。

英語で書くことが最も困難な作業になっている要因については、まだ十分な検証ができていない。そのため、ここでは断定的なことは言えないのだが、英語である程度長い文章を書くという経験が少ないことは一因だろう。英語プレゼンテーションをすることになって、日本語と英語を何度も往來しながら自分の考えを英語で書き記して、原稿を作り上げる作業に初めて取り組んだと思われる。学生からは、「英語で原稿を作っていく場合には、一つの文を作る段階で、単語のレベルでいちいちつまずく。いくら時間をかけても完成していないように思えるし、完成といえるかどうか自信がない。」また、「締め切り日が刻々と迫ってきてしまった。もっと早くに組み組めば良かった」といった言葉も聞かれている。

他にも、プレゼンテーションに対して困難さを感じる要因としては、「発表内容の整理(もしくはテーマ選び)の難しさ」、「(実際に経験してみるまで)英語でプレゼンテーションをすることへの不安が強い」、「原稿を書き上げるために費やす作業量・時間が予想しているより多い」のような内容が考えられる。学生は英語で原稿を書くことに困難さは感じていても、遠隔授業、科学実験、プレゼンテーションコンテストのいずれにおいても、発表後には自信ややりがいを認める結果が出ている。(松田・石川・小野(2008)、苫小牧高専(2008)、苫小牧高専(2009)) 学生は、困難さはあるものの、英語でのプレゼンテーション自体に取り組むことには肯定的で、達成感を感じている。そのため、英語の学習支援という点では、英語で書くことに対する指導にどのように取り組んでいくかが課題になる。

5. 2 魅力的なプレゼンテーション ～プレゼンテーションの評価～

英語の総合的なスキルが求められるが故に、具体

的に何を指導するとプレゼンテーション能力に効果があるのかに関してはまだあまり明らかになっていない。プレゼンテーション能力を判断する観点も、多岐にわたっていることが報告されているので、プレゼンテーション能力を構成している要因も複雑であり、明確にはなっていないと考えられる（石川（2009））。

実際、先に紹介した大学での授業例で、プレゼンテーションの評価に関する記述は、篠塚（2008）の例にのみみられる。ここでは、「外形的なもの」をまず評価し、それに内容に関わる項目を加味しているとある。「外形的なもの」としては、原稿を見ずに発表する、音量が十分である、スライドが発表内容の理解を助けているといった点、さらに内容に関わる項目としては、正確な表現、簡潔で分かりやすい表現、科学分野として適切な語句や言い回しといった点が挙げられている。その他の事例については、プレゼンテーションについての評価にはふれられていないので、詳細はわからない。

石川（2009）は、プレゼンテーション能力と評価観点、言語技能との関係性を調査した。評価観点としては、創造性、説得力、内容、構成、自信、熱意、声量、ペース、ボディラングージ、視覚補助の10点をあげた。プレゼンテーションを学ぶ授業およびその後の合宿研修に参加した学生30名の発表を、教員5名（日本人3名、英語母語話者2名）、本人以外の参加学生29名の合計34名が評価した結果についてクラスター分析を行った。その結果、プレゼンテーション能力は、情意面と論理面の大きく2点の要因と関わりがあることがわかった。情意面というのは、説得性・自信・内容・熱意・ボディラングージで、この中でも熱意・自信は評価の良し悪しがはっきりと分かれやすい観点であった。そのため、これらの観点に関して指導をすることによってプレゼンテーションの全体評価を向上させることが期待できるとしている。⁷⁾

この結果からは、プレゼンテーションを聴いて説得力がある、話し手の自信や熱意が感じられるものについて、聴衆は高い評価をするとわかる。Gallo（2010）は、アメリカ・アップル社のCEOのスティーブ・ジョブズ氏のプレゼンテーションを分析・解説している。Galloは、ジョブズ氏のプレゼンテーションは、聞き手に伝えたい情報を一貫して何度も伝えているため「聞き手にわかりやすいこと」、視覚資料となるスライドの「シンプルさ、簡潔さ」のため口頭で伝えられる内容について見る側の視覚に強く印象付けること、「ボディラングージを効果的に使っ

ている」などといった点が挙げられている。さらに、プレゼンテーションの中で実演を取り入れることで観客を巻き込んでいくという点にもふれられている。

つまり、聴衆がひきつけられるような魅力的なプレゼンテーションをするという点からは、プレゼンテーションを「人前で発表する」段階から、「聞き手に伝える、関心を持ってもらう」段階へと、聴衆をより意識したものになるようにプレゼンテーションの内容や表現方法を掘り下げていく必要がある。現在、学校レベルではプレゼンテーションのやり方自体を指導し始めたところであるが、高専においては日本語でも英語でもプレゼンテーションを経験することを活かしていくことによって、この点をより強く意識した指導ができる可能性があると考えられる。

6. まとめ

本稿では、大学における授業例との比較をしつつ、高専での取り組みの特徴をまとめ、今後英語プレゼンテーションの取り組みを継続していく上での課題や可能性を述べた。苫小牧高専の実践例では、主に英語を母語とする聴き手に伝える実体験型の取り組みを行っていること、英語でのプレゼンテーションの前に日本語でのプレゼンテーションを経験していること、グループによるプレゼンテーションを行っていることなどが特徴である。一方、大学などでは、学会発表や国際会議などの場面におけるプレゼンテーションに取り組んでいる例が多いことがわかった。

英語でのプレゼンテーションは、総合的なスキルが求められる活動である。プレゼンテーションと英語の四技能との関連をまとめてみると、まず準備として事前に情報を調査し、文献を読む、プレゼンテーションの原稿を書く。そして、口頭で発表する。さらに、発表後に質疑応答のためには、相手の話を聞いて理解して応答する必要がある。また、自分が発表するだけでなく、ほかの人のプレゼンテーションを聞くこともある。つまり、プレゼンテーションの指導においては、それぞれの段階で行う内容を全体的に網羅することによって、四技能を全般的に使う必要性が生じる。プレゼンテーションを英語でするためには、英語の基礎的な読み書き力を駆使していくことが必要である。学生がプレゼンテーションの準備に困難を感じている点については、どのような点が問題なのかを今後調査していく必要があるだろう。

さらに、プレゼンテーションにおいては、「どのような内容を伝えるか」ということだけでなく、発表

する時の声の大きさや姿勢、ボディランゲージなど、「相手に効果的に伝えるにはどうしたらいいのか」、「どのように表現するのが望ましいか」という点も必要な要素である。これらについて、何が望ましいかという知識を指導しつつも、学生が「相手に伝えたい」という気持ちをもって、「相手に伝わる」ように表現すること（話し方、熱意・自信ある態度、視覚補助の活用など）を理解し、このことを各自が実践できるようになることが課題である。これは、コミュニケーション力や英語力を高めていくことにもつながるものと考え、今後の指導につなげていきたい。

注

- 1) JABEE 認定基準の基準 1「学習・教育目標の設定と公開 (1) の(f) 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力という項目がある。
http://www.jabee.org/OpenHomePage/ki jun/criteria2010_081112_100715.pdf
 苫小牧高専のプログラムの学習・教育目標にもこれに対応する事項が設定されている。
<http://www.tomakomai-ct.ac.jp/contents/jabee/?section=goal>
- 2) 地域によっては、プレゼンテーション部門の地区大会を行っているところもあるが、苫小牧高専の属する北海道地区では平成 22 (2010) 年度現在では行われていない。プレゼンテーションコンテストの詳細については、全国高等専門学校英語教育学会 (COCET) に記されている。
<http://cocet.org/precon/2010/youkou.htm>
- 3) 藤田・山形・竹中 (2009) は、経済・経営学部の学生を対象にした授業において、日本語または英語でプレゼンテーションをした経験がある学生は 1 割程度で、英語で行ったことがある学生はほぼいない状況であったという結果が出ている。
- 4) 山田 (2008) は、「日本人の英語力とは、バイリンガルの一方としての英語力であり、すでに培われた日本語力の上に重ねられるもの (p. 149)」であり、「英語力は日本語との協力関係の上になりたっている (p. 210)」という観点から英語力の育成を論じている。高専において日本語でプレゼンテーションをすることによって培ったスキルは、英語でのプレゼンテーションに活用されている

可能性があると考え、

- 5) チームワークという点も、1) にあげた苫小牧高専の学習・教育目標に設定されている項目である。
- 6) 市川 (2006) が「コミュニケーション力」の根幹 (p. 61)」と考える、ことばでのやりとりの間に生じる言葉以外の情報の取り込みや判断といったプロセスを、遠隔授業を通じて学生が学んでいることを期待している。
- 7) プレゼンテーションの評価に関する研究は他に例が見られなかった。一方で、良いプレゼンテーションというテーマについては、ビジネス向けの実用書やプレゼンテーションを指導する書籍などに数多く書かれている。例えば、平井 (2007) は、伝えたいメッセージを明らかにするためには、“So what?” の問いかけに答えられるものであることを挙げている。Reynolds (2008) では、スライド資料については、図絵や写真などの視覚的な表現方法に加えて、言葉で伝えることをアドバイスしている。

参考文献

- 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」東京経済大学人文自然科学論集第 128 号、pp. 35-53、2009
- 古屋興二・Olga BRIGHT・雑賀高「グローバルエンジニア育成における英語教育」工学教育、56-4、pp. 21-26、2008
- Gallo, Carmine. *The Presentation Secrets of Steve Jobs: How to Be Insanely Great in Front of Any Audience*, McGrawHill, 2010
- 平井通宏『エンジニアのための英語プレゼンテーション超克服テキスト』オーム社、2007
- 市川力「英語を「教えない」ことの意味について考える」『日本の英語教育に必要なことー小学校英語と英語教育政策』(大津由紀雄編著)、慶應義塾大学出版会、2006
- 石川希美・松田奏保「苫小牧高専における海外研修プログラムの構築」全国高等専門学校英語教育学会研究論集、第 29 号、pp. 101-110、2010
- 石川希美・松田奏保・小野真嗣「高専における実践的英語コミュニケーション活動を中心とした海外遠隔授業の取り組み-英語が使える技術者の養成を目指して-」全国高等専門学校英語教育学会研究論集、第 28 号、pp. 25-34、2009
- 石川慎一郎「英語プレゼンテーション能力の構成要

- 因「大学英語教育におけるプレゼンテーション指導の在り方について」日英言語文化学会紀要、第1号、pp. 1-18、2009
- 松田奏保・石川希美「実践的テーマによる国際産学連携共同教育の推進」平成20年度高専教育講演論文集、pp. 63-66、2008
- 松田奏保・石川希美・小野真嗣「TV会議システムを用いたニュージーランドとの遠隔授業実施報告」苫小牧工業高等専門学校紀要、第43号、pp. 39-53、2008
- 小野義正・森村久美子「国際的に通用する技術者に求められる英語コミュニケーション力の開発」工学教育、56-1、pp. 48-54、2008
- 大津由紀雄『日本の英語教育に必要なことー小学校英語と英語教育政策』慶應義塾大学出版会、2006
- Reynolds, Garr. *Presentation Zen: Simple Ideas on Presentation Design and Delivery*, New Riders, 2008
- 篠塚和夫「群馬大学における産学連携による理系専門英語の実践型教育」工学教育、56-3、pp. 53-61、2008
- 田村武志「高度IT技術者のための英語コミュニケーション・スキルアップ戦略」サイエンティフィック・システム研究会2008年度教育環境分科会第2回会合、2008
- 苫小牧工業高等専門学校『実践的テーマによる国際産学連携CEの推進』、平成19年度大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）成果報告書、2008
- 苫小牧工業高等専門学校『実践的テーマによる国際産学連携CEの促進』、平成20年度大学教育の国際化加速プログラム（海外先進教育実践支援）成果報告書、2009
- 山田雄一郎『英語力とは何か』大修館書店、2006